論 文

被収容者の更生意識に関する研究
－矯正管区との共同研究　中間報告－

中央研究所　　藤原　正
小島　賢一

序

中央研究所では，平成２年度より各矯正管区との共同研究の一環として，「被収容者の更生意識に関する研究」を実施しており，３年度とも調査管区を拡大して，継続研究されている。今回はその経過報告を兼ね，２年度，各矯正施設で実施された調査の結果を概観する。なお，本稿は中間報告であり，全データの収集後に正式な検討結果を公表する予定である。

1　目的

矯正施設（刑務所・少年院・少年鑑別所）の被収容者（以下，収容者と記す）の更生についての意識とそれに影響を与えている要因について，現在得られているデータに基づいて，成人・少年別に検討を行う。

2　方法

実施要領に基づき職員が教示後，原則として集団で，収容者が調査票の記入及びマークカードの記載を行い，後刻，職員が２つを照合してデータの誤りを訂正した。記入されたマークカードは，コンピューターによって入力，集計，分析した。

3　研究１　－刑務所での調査－

最初に刑務所で行われた調査とその結果について述べる。

３－１　調査対象

平成２年度調査時（８月～10月）に工場に出役している収容者2667名（名古屋・広島・高松の３管区12施設，男子2337名，女子330名）

３－２　分析手続１　基礎集計

今回，対象となった収容者の特質と反応の概観を見るために，単純集計の結果について述べる。

○調査対象者の特徴

調査対象となった収容者の特徴を概観する。まず，年齢は表１の通りで，60歳以上の高齢と20代の若年層が少ないが，特定の年代が全体の結果を左右するほど偏りはないものと思われる。

表1　年齢区分

	不明	～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～59	60～	計
数	1	68	270	295	431	564	410	494	134	2667

刑期は6ヶ月から2年未満が全体の59％で，刑務所入所が初めての者は48％と約半数であった。最終学歴については53％が中学卒業以下。入所直前の職業については，無職が34％，会社員・土木作業員が1割程度といったところが比較的大きな部分を占めている。また，65％は運転免許を含め何らかの資格・免許を持っていた。なお，反社会性集団の関係者は対象者の21％である。

また，刑務所にはA，B，L，F，W級等の収容者を区分する分類級があるが，ここでは施設の主な分類級から対象者を便宜的に以下の4群に分けた。

①A級656名（A級とは，刑務所の初回入所者を中心とした犯罪傾向が進んでいない者の分類級であり，本研究では，以下L，W級を除いたA級をA群と総称する）

②B級899名（B級は，刑務所の複数回入所者を中心とした犯罪性が進んでいる者の分類級で，同様にL，W級を除いたB級をB群とする）

③L級782名（L級は，合算残刑期，つまり刑が決定した時点での収容期間が8年以上の長期の収容者の分類級で，W級を除き，A，B級を問わないL級をL群とする）

④W級330名（W級は女性収容者の分類級で，L，A，B級を問わないW級をW群とする）

従って，WA級の場合は，W群に，LB級の場合はL群として処理した。

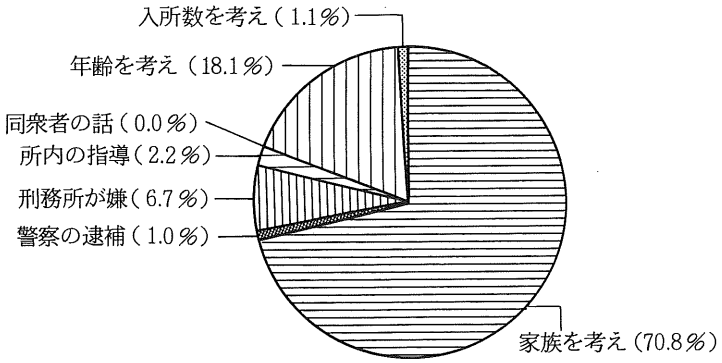
刑務所退所後の身元引受人に関しては，63％が「親族」を，28％は「保護会を含め親族以外の者」を，9％は「なし・未定」といった状況であるが，「親族」を引受人にした者の3％，「親族以外の者」を引受人にした者の5％，「保護会」を引受人にした者の33％，全体の17％の者は，引き受けてもらえるか分からないと言う。これを級別に見ると，A群では8％，B群が25％，L群が16％，W群は14％が引き受け状況が未確定であり，B群が引き受けに関して，最も見通しを持てずにいることが分かる。

○　更生についての反応

更生の意思については，不明4名を除いて，全体の95％の者は，「更生しようと思っている」と回答しており，ほとんどの者が更生したいと考えていることが分かる。ただ，これには群間に相違があり，A，W群では99％が，L群も96％が更生しようと考えているのに対して，B群では89％とやや少ない。さらに，「更生に自信があるか」という問いに対しては，全体でも若干減って，87％の者が「ある」と回答するにとどまっており，更生したいと考える者の内，1割の者は，「気持ちはあるが，更生に自信がない」状態であることが示された。なお，B群は「更生に自信がある」と回答した者が76％であり，ここでも他群に比べて少なくなっている。

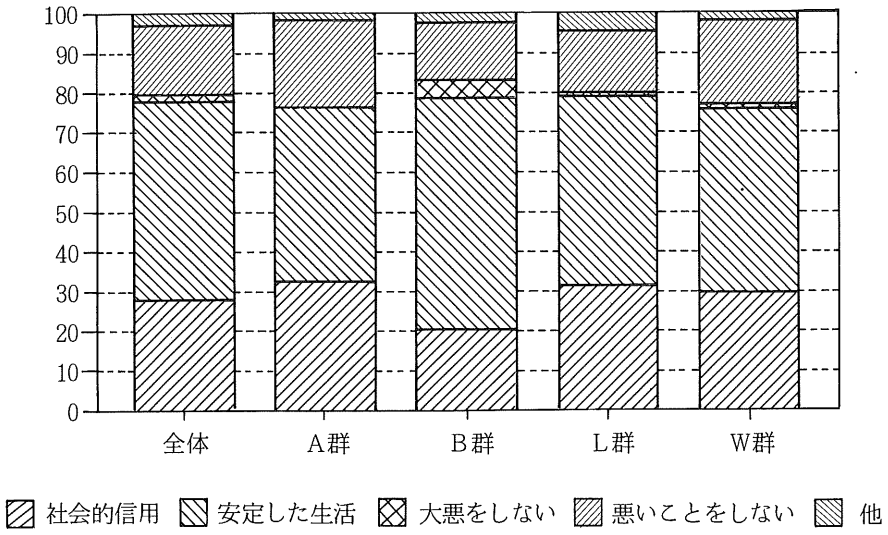
更生したいと思うようになったきっかけは，「家族を考えて」が最も多く，続いて「年齢を考えて」，「刑務所の生活が嫌だから」の順となった。「刑務所の指導を受けたから」といった理由をあげた者は少なく，矯正職員にはやや落胆する結果と言えようが，収容者にとっては，それだけ社会に残した家族のことが重要な関心事であることが分かる。

図１　更生したいと思ったきっかけ
―不明・他・非該当を除く―



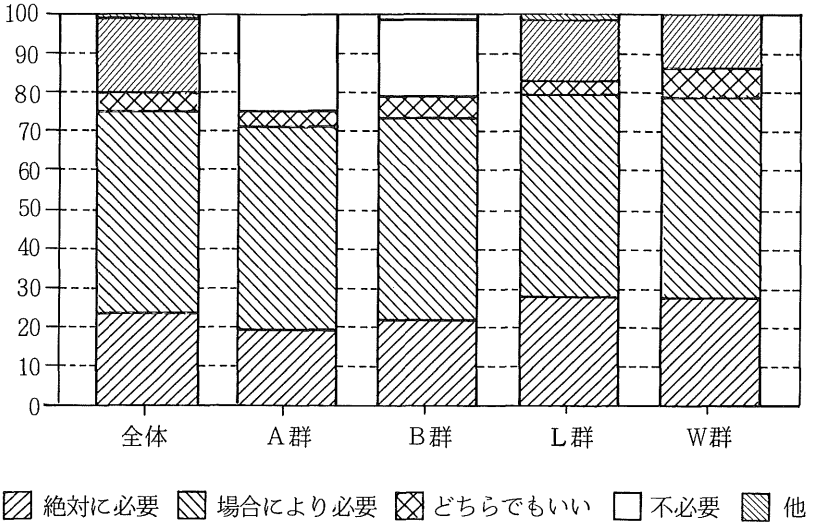
ところで，収容者が考える更生とはどういう内容を示すのかといった点に着目すると，最も多かったのは，「周りの人から信用される」のが更生であるという反応であり，「落ち着いた生活ができる」「家族を養う」といった反応が続いた。その内容を「社会的信用を得ること」「自分の生活を安定させること」「大きな悪いことはしないこと」「悪いことをしないこと」「その他」の５つに大別し，群別に比較してみた。いずれも収容者の半数前後は，「定職に就いて自分の生活を安定させること」が更生であると考えており，Ｂ群が最も多い。それに対して「社会的信用を得ること」であると回答している者は，Ａ，Ｌ，Ｗ群では３割前後いるが，Ｂ群は２割と少なくなっている。また，「大きな悪いことをしないこと」が更生であると考える者は，Ｂ群のみ4.5％であとは１％未満であった。ちなみに「大きな悪いことをしないことが更生だ」と考える者だけを取り出して，更生への自信とのクロス集計をすると，Ａ，Ｂ，Ｌ，Ｗ群，いずれも更生する自信がない者が多い。

図２　「更生する」内容



次に更生に必要なものを尋ねた質問では，全体の2/3が「自分の気持ちさえしっかりしていればよい」と回答している一方，別な質問で「周囲からの援助が必要か」と尋ねた場合，3/4は援助が必要であるとも回答している。自己の心構えを第一とはするものの，完全に独力では更生しきれないと考える収容者の心情が見られた。なお，群別に見た場合，特徴的なのは，「援助は必要ない」とした者の比率で，A群の1/4が「必要ない」と反応しているのに対して，その他の群ではB，L，Wの順で徐々に少なくなり，W群では1/8程度になってしまう。A，B，L，W群となるに従って，単独での更生が難しいと認知されていることが分かる。

図3　援助の必要性



では，具体的にどういった人物を頼りにするかというと，やはり「家族・親族」が約半数と最も多く，「自分」という反応が3割で続き，残りの「知人・友人」，「将来の雇主」などはわずかである。家族は，更生意思を持つきっかけとしても大きいだけでなく，最も頼りにされていることが分かる。なお，B群については「家族・親族」を頼りにする者は他群より1割程度少ない。

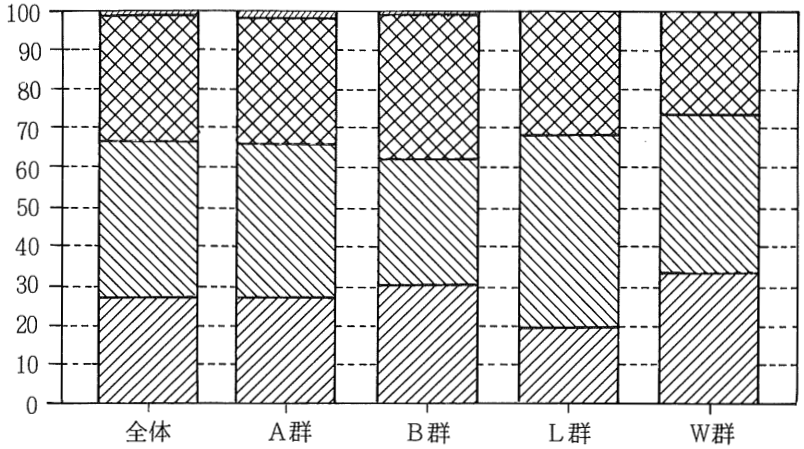
また反対に今まで更生の助けにならなかった人物の中では，友人が17%，家族が15%，保護司・観察官，警察官がそれぞれ5%前後であった。

退所後の職業は，一応，半数以上が決まっているとしているものの，群間の差が大きく，決まっている者はA群で68%，B群が55%，L群が49%，W群で45%となっている。L群は，長期間の収容で見通しが立てにくいとか，W群（女性群）では家庭に戻るといった群固有の問題が背景にあるためと思われる。先にA，B，L，W群となるに従って，単独での更生が難しいと認知していることを示したが，こうした就職見通しの差なども，ひとつの原因になっていよう。全体では，予定の就職先では，「土木作業員」が最も多く，「会社員」「運転手」，「工員」などが続いている。なお，女性に限定すれば，「水商売」，「調理」などが目立っている。

社会的な差別，ラベリングについては，1/4が差別されることはないと楽観しているが，残りは差別されることも予想しており，特にL，W群では差別されて困ることが多いだろうと考えている者が多い。しかし，B群ではむしろ居直りとも思えるような「差別されても特に困らない」

といった反応が，差別されて困る者よりも多く，興味深い結果と言える。

図4　ラベリングについて



▨ 差別されない　▧ 差別されて困る　▩ 差別されて困らない　▨ 不明

最後に多くしてもらいたい処遇の要望では，1/4の収容者が職業訓練の拡大を希望し，余暇活動が2割，面会・通信回数と部外者との相談が1/8と続いた。社会生活と結びつく処遇やより多く社会の者との接点がある処遇を収容者が求めていることが分かった。

3－3　分析手続2　多変量解析

次に更生の意思と更生への自信に影響を与えていると思われる要因についてLOGIT,PROBITの手法と重回帰分析を行って検討する。要因とした項目は，「更生の意思」および「更生への自信」項目との相関を中心に選択したが，他に基本的な説明変数として年齢と入所回数も加えた。

回答形式が，2以上の選択肢を持つ，更生への自信については重回帰分析で，二者択一式の更生の意思についてはLOGITで処理をし，PROBITによりその結果を裏付け，相違がないことを確認した。なお，これまでのべたように群間に差があると思われるので群別に統計処理をした。

表2　多変量解析結果のまとめ

＋－→1％水準有意 ＋－→5％水準有意	更生への意思				更生への自信			
	A	B	L	W	A	B	L	W
年齢が高くなるほど					＋	＋	＋	
入所回数が多いほど						－		－
引受に希望があるほど			＋		＋	＋	＋	＋
反社会性集団に関わるほど		－	－			－		
周囲の援助が必要とするほど		＋						
就職が決まっているほど		＋			＋	＋	＋	＋
真面目な者ほど更生する					＋	＋	＋	
所内生活が役立つ		＋	＋				＋	

○A群

A群の更生意思の有無に有意な影響を与えている要因はなく，10%水準で「刑務所で真面目に努める者ほど多く更生する」と考える者が，更生の意思を持ちやすい傾向が見られたにとどまった。この原因としては，A群の更生意思を左右する要因がないのではなく，その99%が更生意思を示しているため，統計的な差として現れにくかったと考えられる。これに対して，更生への自信については以下の項目で有意差が見られた。

（＊は5%水準，＊＊は1%水準，以下同じ）

＊①年齢は加齢するほど更生に自信を持つ。

＊＊②引受に希望があるほど更生に自信を持つ。

＊＊③社会復帰後の就職が決まっているほど，更生に自信を持つ。

＊＊④刑務所で真面目にやる者ほど多く更生すると認知する者は，更生に自信を持つ。

ここでは，社会復帰後の見通しがはっきりしているほど更生に自信を持つ傾向と，刑務所内での真摯な生活態度と更生の可能性を結びつけて考える者ほど，更生に自信を持つ傾向，年齢が上がるほど自信が出る傾向が認められた。なお，A群は犯罪性も比較的進んでおらず，複数回入所者も少ないため，反社会性集団加入や入所回数との有意差が出なかったと考えられる。

○B群

B群の更生意思については，次のような項目に有意差が出ている。

＊＊①反社会性集団に関係あるほど，更生意思をなくす。

＊＊②更生に周囲の援助も必要であると考える者ほど，更生意思を持つ。

＊＊③社会復帰後の就職が決まっている者ほど，更生意思を持つ。

＊④刑務所の規則正しい生活が社会復帰後の生活に役立つと考える者ほど，更生意思を持つ。

B群ではA群に比較して，更生意思と要因との間にはっきりとした傾向が現れている。暴力団などへの加入が，更生したい気持を失わせること，出所後の生活の見通しが立っているものほど更生の意思を持ちやすいこと，刑務所の生活体験を肯定的に捉える者は更生意思を見せることが示された。

周囲の援助が必要であると認知する者ほど，更生の意思を持つという結果については，更生の意思がある者ほど周囲の援助の必要性を認知するようになると表現した方が良いと思われる。

B群の特徴は更生への自信を見るとより鮮明になる。

＊＊①年齢は加齢するほど更生に自信を持つ。

＊＊②入所回数は増えるほど，更生に自信がなくなる。

＊＊③引受に希望があるほど更生に自信を持つ。

＊＊④反社会性集団に関係あるほど，更生に自信をなくす。

＊＊⑤社会復帰後の就職が決まっているほど，更生に自信を持つ。

＊＊⑥刑務所で真面目にやる者ほど更生すると認知する者は，更生に自信を持つ。

年齢，引受人，就職の見通し，所内生活と更生率との関係の認知はA群と同様の結果を見せているが，ここでは意思だけでなく自信に関しても暴力団などとの関係は大きな影響を与えていることが分かった。入所回数が多くなる，すなわち，これまで更生に失敗してきた者ほど更生に自信をなくすといった結果も見られた。なお，入所回数や反社会性集団に関してB群に明確な有意差が現れたことについては，A群に比べて複数回入所者や加入者が多いためにその差がはっきりしたものと考えられる。

○L群

L群の更生の意思については，次のような項目に有意差が出ている。

＊①引受に希望があるほど，更生意思を持つ。

＊＊②反社会性集団に関係あるほど，更生意思をなくす。

＊＊③刑務所の規則正しい生活が社会復帰後の生活に役立つと考える者ほど，更生意思を持つ。

反社会性集団要因と所内生活の有効性についてはB群と同様であるが，L群では引受要因に関しても有意差を見せている。収容が長期間になり，社会との関係が希薄になりがちなL級では，引き受けにどれだけ見通しがあるかによって，更生の意思を持てるかどうかが，B群よりも大きく影響されることが示された。

更生への自信については，

＊＊①年齢は加齢するほど更生に自信を持つ。

＊＊②引受に希望があるほど更生に自信を持つ。

＊＊③社会復帰後の就職が決まっているほど，更生に自信を持つ。

＊＊④刑務所で真面目にやる者ほど更生すると認知する者は，更生に自信を持つ。

＊⑤刑務所の規則正しい生活が社会復帰後の生活に役立つと考える者ほど，更生に自信を持つ。

自信についても，概ねA，B群と同様の結果を見せているが，社会との関わりや長期間に及ぶ所内生活への構えが，よりはっきり自信に影響を及ぼしているのが分かった。

○W群

A群同様，更生意思に関して有意差を見せた項目はない。更生意思を示した者が，極端に多かったことが原因と思われる。

更生への自信については，

＊＊①入所回数は増えるほど，更生に自信がなくなる。

＊②引受に希望があるほど更生に自信を持つ。

＊＊③社会復帰後の就職が決まっているほど，更生に自信を持つ。

に有意差が見られた。

W群においては，社会との関係がどれだけ保たれているか，従来どれだけ更生に失敗してきたかといった点が，更生への自信に影響を与えていることが示された。

３－４　研究１の考察とまとめ

(1)　ほとんどの収容者が更生したいという意思は持っているものの，群によっても若干の相違があり，犯罪性が進んでいるB群においては，10人に１人はそれを失っている。

更生したいという気持ちは，「家族」や「年齢」を考えたことがきっかけとなって生じることが多く，どういった状態を更生と考えるかという点では，収容者の大半が「長く定職に就き安定した生活を送れる」とか「社会的な信用を得る」状態が，更生であると回答している。

しかし，一部には「大きな悪いことをしない（多少悪いことをしても，見つかるようなことはしなくなる。暴力団に入っていても，絶対かたぎに迷惑をかけないような生活をする）こと」であると捉えている者もいる。これは更生の概念の中でも最低限度の条件であろうし，「小悪」を容認している点では，「更生」の枠から外れているということもできる。このような低い水準を更生と考えさせているものはなんであろうか。仮説としては，自分のできそうな範囲に目標を設定して，更生への自信を持とうとする心の動きから生じた可能性も考えられる。しかし，更生へ

の自信とのクロス集計の結果では，「小悪」を容認する者は，むしろ更生に自信がないものが多い。つまり，更生への自信を持ちたいから目標を低く設定した訳ではないことが分かる。ここでは，むしろ態度や価値観の歪みが背景にあって，それが「小悪」を容認させたり，更生への自信を低下させたりしている者が多いのではないかと考えられる。

(2)　更生の意思を持つ，持たないに有意な影響を与える要因は，B，L群のみに見られた。更生の意思を促進する要因のひとつは，「刑務所内の規則正しい生活が社会復帰後に役立つ」という認知である。刑務所での生活体験を単に罰を受けているという認知をするのではなく，社会復帰への準備であると認知できる者，極端に言えば，自分が刑務所生活を送る必要性を一部認め，所内生活と社会生活の関連性を認められる者が，更生の意思を持つようになることが分かった。反対に阻害する要因としては「反社会性集団との関わりの深さ」があげられる。これについては，「そもそも悪いことを止める気がない，つまり更生する意思がないから，反社会性集団に関わって行った」のか，「反社会性集団に関わるようになって態度・価値観が歪み更生意思をなくした」のか，その因果関係は不明であるが，いずれにしても不良集団と関わるということが，更生の意思すら失わせているという結果は重要である。

更に，B群に固有に見られた要因として，更生の意思がある者ほど，自分一人だけで更生することは難しいという認知をする傾向がある。これは他群には有意な影響を及ぼしていない要因であり，B群の更生意思の有無だけに有意差が見られた点である。この原因は，入所回数4回以上の者がB群では半数を越えているのに対して，それ以外の群では1割程度しかいないことに関連があるのではないだろうか。つまり，過去，更生に繰り返し失敗している体験の中で，更生を諦めた者は，周囲の助力に期待も関心もないし，更生意思を持ち続ける者は，独力での更生の困難さを認識せざるを得なくなるのであろうと考えられる。

ここでB，L群にのみ有意な結果が出たことについては，おそらくは他群で，「更生したい」という回答が極端に多かったためと思われ，回答が一方に偏らなかった場合には，A，W群においても同様な傾向は存在しているのではないかと考えられる。

(3)　更生への自信という点では，やはり大半の者は自信があると回答しているものの，更生する気持ちのある者の内，1割の者は，「気持ちはあるが，更生に自信がない」という状態である。特にB群は「更生に自信がない」と回答した者は，全体の1/4と多い。

各群共通して更生への自信を促進する要因としては「引き受けに希望が持てること」と「社会復帰後の就職の見通しがあること」があげられる。これらは将来への期待の具体的な裏付けとなるもので，更生への自信には，本人の意気込みだけでなく，こうした裏付けが必要であることが示された。

また，女子を除く，各群に見られた要因のひとつに年齢の問題がある。年齢は上がれば上がるほど，更生に自信を示すという結果になっている。単純に考えれば，高年齢になって刑務所に入所するほど，社会生活・家庭生活への影響も深刻で，それだけに更生への自信も失いやすいのではないかと考えられる。いわば「若いからやり直しがきく」といった考え方が，通用しなくなり，自信もなくなると思われる。しかし，結果は逆である。これについて推測を交えた考察を行えば，先に更生したいと思うようになったきっかけについて，「家族を考えて」と「年齢を考えて」といった理由が大きいことを述べたが，いずれも加齢に伴って深刻に考えざるを得なくなる理由である。加齢は更生への動機を強めるという側面を持っており，それが収容者に「絶対に自信がある」と宣言させてしまっているのではないかということが考えられる。次に年をとり，体力・腕

力などの身体的な衰えを感じ，それが自分の再犯を難しくするであろうという期待と予測になり，更生への自信を安易に促進したということも考えられる。さらには年をとると，経済的，社会的にも自由に動けなくなる，つまり，収入の大半を家族の生活費に費やさなくてはならないとか，転職も難しくなる社会的状況が，これからは「定職に就いた安定した生活」を選択せざるを得なくなるという予想につながり，それがまた安直な自信の裏付けになってしまっているということも考えられる。ただ，これらについては，いずれも推測でしかなく，今後，更に研究を重ねることが必要であろう。

更にB，W群に見られた特徴として，入所回数が増えるほど更生に自信をなくすという有意な傾向が見られた。過去に更生に失敗すればするほど自信をなくすのは当然の結果である。ここでA，L群には有意な傾向は得られなかったが，これもA，L群に初入が多い，あるいは長期収容のために多数回入所の者が少なかったために統計上の有意差が出なかったと考えられ，A，L群においても過去の更生の失敗体験が更生への自信と無関係であるとは考えにくい。

(4)　刑務所についての認知項目に限定して，更生への自信との重回帰分析を行ってみると「刑務所での規則正しい生活は，社会に出てから役立つ」，「刑務所で真面目に努める人には，更生する人が多い」と考える者ほど，更生への自信を持ち，反対に「刑務所で真面目に努めることと更生することとは違う」と考える者ほど，自信を失うという結果になった。刑務所の生活と社会生活の関連性を認めている者ほど，更生に自信が出ると言えよう。この関連性の認知は，収容者の更生を考える上で，かなり重要な位置を占めていると考えられる。なお，「刑務所の作業は，更生に役立つ」という認知は，もちろん自信を強める方向に影響しているが，この影響は「刑務所で真面目に努める人には，更生する人が多い」という項目に吸収されており，収容者の意識の中では「真面目に努める」ことと「真面目に作業をする」ことが近く，「努め」に「作業」の意味が含まれた形になっていることが考えられる。

(5)　これらの結果を踏まえて，刑務所での処遇について考えてみたい。ほとんどの者が更生意思を持っているとは言うものの，一部の者，特にB群に関しては，そもそも更生したい気持ちを起こさせるような動機付けの指導が必要となる。

では，この更生したい気持ちを惹起するには，どういったことが必要であろうか。
まず，更生の意思との因果関係は別にして，とにかく反社会性集団に加入している者に対しては，そこからの離脱を積極的に勧めることである。次に所内での規則正しい生活が社会復帰後に役立つという考えを起こさせることである。作業や余暇活動などの日課や規律正しい生活態度は，所内だけのものでなく，健康な社会生活を送る上でも必要なことであること，いわば所内生活と社会生活との関連性を自覚させることが大切であろう。この点で，収容者自身も社会との接触が多くなるような処遇を望んでいることでもあり，社会から切り離された感じを与える処遇でなく，いわば社会との風通しが良い処遇といったものを一層押し進める必要があろう。

また，特にB群においては，自助努力の大切さを伝えることは基本であるにしても，何が何でも独力で更生するといった考え方を改めさせ，人と人との相互協力が必要であることを認識させること，保護調整などで，なるべく社会復帰後の職業生活について見通しを持たせることも重要である。さらに「家族」や「年齢」のことを内省させることも，更生意思を持たせる処遇としては有効と考えられる。

更生への自信については，反社会性集団からの離脱を勧めることが重要であるのは言うまでもないが，保護状況がこの自信にかなり関わっている。引受人の確定やその意志の確認，そして社

会復帰後の就職の見通しなど，退所後の生活に具体性があればあるほど更生への自信は深まる。将来の生活設計に如何に具体性を与えていくかが重要である。保護調整を積極的に進める他には，退所後の生活に具体性と支援を与える意味での職業訓練や補習教育も有効であろう。面会・通信といった機会を捉えて，引受人と収容者双方に，退所後の生活について出てから考えるのでなく，なるべく事前に現実的に考えるよう促すことも大切である。

また，ここでも所内生活と社会生活との関連について十分に認識させることが必要であるのは言うまでもない。

4　研究2　－少年院・少年鑑別所での調査－

次に少年院と鑑別所で行われた調査とその結果について述べる。

4－1　調査対象

平成2年度調査時（8月～10月）に各少年矯正施設に収容されていた収容者735名（名古屋・広島・札幌・仙台の4管区22施設，男子656名，女子79名－少年院615名，少年鑑別所120名）

4－2　分析手続3　基礎的な集計

今回，対象となった収容者の特質と反応の概観を見るために，単純集計の結果について述べる。

○調査対象者の概観

調査対象となった収容者の特徴を概観すると，年齢については表3の通りで，15歳以下の低年齢が少なく，19歳以上の少年がやや多い。

表3　年齢区分

	不明	14,15	16	17	18	19	20～	計
数	4	85	93	141	161	185	66	735

しかし，人数的には高校卒業該当年齢者が多いものの，実際の最終学歴については71%が中学卒業以下であり，高校卒業以上の学歴を持つ者は全体のわずか4%でしかない。また不明や訓練中の者を除くと全体の63%は何の免許も資格も持っておらず，総じて，低学歴，無資格の者が特徴となっている。こうした社会的ハンディキャップは，就業状況にも影響すると思われるが，入所直前の職業を見ると無職が48%と約半数を占め，正社員として稼動していた者は30%となった。就業者にアルバイトやその他を含めたとしても，無職者の方が多く，非行少年の生活態度の悪さや意欲のなさといった問題だけでなく，社会的ハンディキャップも就業状態を悪くしていることが考えられた。

なお，暴走族は21%，暴力団員は13%，地元の不良集団には11%が加入しており，全体の46%は何らかの不良集団と関係があったと回答している。

家庭状況については実父母が揃っている者が46%，実父または実母のみが34%といったところが中心となっている。

非行原因について，自己の「性格」，「非就業」，「不注意」を問題とした者は全体の7割で，大半が自分に原因があると認知しているが，残りの3割については他罰的な要因を非行原因とし

て挙げている。具体的には，60％の少年が「自分の性格に問題があった」と回答し，次に「不良者の誘い」が14％，「家庭・学校に問題があった」とする者が10％である。

更生の意思については，不明２名を除いて，全体の96％の者は，少なくとも「できれば更生したい」という意思を持っているが，更生に「自信がある」と回答した者は，75％とやや低くなっている。この２つをクロス集計した場合，更生の「意思はある」が「自信がない」者が，全体の22％となり，約２割の少年が，更生したいとは思うが不安も感じている状態にあることが分かる。

４－３　分析手続４　更生促進要因について

問８（注１）の更生にとって役立つと思われる62項目の質問について，「とても役立つ」から「全く役立たない」まで５段階評定をさせた結果を見ると次のようになる。（図５）

ここでは紙数の関係から少年鑑別所と少年院を一緒に処理した結果を提示したが，２つを比較すると，少年鑑別所の少年が少年院の少年より有意に重視している更生促進項目は「家族が金持ち」，「仕事の資格・技能がある」，「体力がある」，「頭が良い」といった４項目となり，少年鑑別所の少年の方が，本人が既に保持している恵まれた条件を重視していることが分かる。なお，少年院の少年が有意に重視している項目は特になく，２群の各項目の順位相関は，0.925となり，全般的には更生促進項目の重視度に大きな相違はないものと考えられた。

これを見ると少年は，まず自分の意思や心構えを最も重視し，次に家族関係を重視していることが分かる。反対に促進要因として軽視されている項目は，周囲からの金銭援助や楽な就業，宿泊場所の提供などとなった。ここでは社会通念と相違しないような結果が示されている。

４－４　分析手続５　更生促進要因の主成分分析

次にこれらの項目に主成分分析を行い，固有値の低い成分，負荷量の低い項目を落とすなどして，項目を41に整理した。

その結果，以下のように仮に命名できる８つの主成分が得られた（グラフ参照）。

①学校受容因　第一因子－学校・教師の受け入れ要因を重視する因子
師信頼Q8(18)　師悩解Q8(53)　師優しQ8(32)　学友受Q8(46)　師易教Q8(11)　師無差Q8(5)
師評価Q8(60)　師補習Q8(39)

②便宜供与因　第二因子－安直な支援を重視する因子
金助友Q8(23)　出泊友Q8(51)　休短職Q8(22)　隣黙認Q8(24)　金助隣Q8(38)　高額職Q8(2)
家金持Q8(1)

③家族受容因　第三因子－家族関係を重視する因子
被信家Q8(14)　教家族Q8(21)　話合家Q8(8)　家仲良Q8(49)　優し親Q8(28)　帰待家Q8(42)

④厳格指導因　第四因子－施設・親からの厳しい指導を重視する因子
施師厳Q8(6)　施内省Q8(33)　施師助Q8(12)　施昔絶Q8(61)　親厳格Q8(35)　施職教Q8(40)

⑤自己意思因　第五因子－自己の意思・心がけを重視する因子
強意志Q8(55)　対人力Q8(48)　適思考Q8(34)　我慢強Q8(27)　明性格Q8(62)

⑥近隣親切因　第六因子－近隣の親切を重視する因子
談隣有Q8(45)　隣職紹Q8(31)　隣指導Q8(17)

⑦友人隣人受容因　第七因子－受け入れてくれる人間関係を重視する因子
暖友有Q8(3)　隣人受Q8(4)　談友有Q8(10)

⑧好条件因　第八因子－恵まれた資質・学歴・資格を重視する因子
高卒歴Q8(13)　優秀知Q8(41)　資技有Q8(7)

図５　更生促進要因の重視度グラフ

注．「更生促進主成分」＝前述の主成分分析の結果からその項目が属している主成分
「項目名」　＝問８の質問番号
「略号」　＝項目内容を略したもの
「平均」　＝『とても役立つ』を５、『全く役立たない』を１とし，N.A. を除いた平均
「グラフ」　＝平均に基づいたグラフ（目安として作成）

更生促進主成分 1	2	3	4	5	6	7	8	項目名　略号	平均	グラフ
				0				Q8(55)＝強意志	M＝4.74	**********
				0				Q8(34)＝適思考	M＝4.65	**********
				0				Q8(27)＝我慢強	M＝4.64	**********
		0						Q8(8)＝話合家	M＝4.55	**********
		0						Q8(14)＝被信家	M＝4.52	**********
								Q8(15)＝適職就	M＝4.51	**********
		0						Q8(49)＝家仲良	M＝4.48	**********
						0		Q8(3)＝愛友有	M＝4.48	**********
						0		Q8(10)＝談友有	M＝4.48	**********
								Q8(30)＝友指導	M＝4.43	**********
		0						Q8(42)＝帰待家	M＝4.42	**********
				0				Q8(48)＝対人力	M＝4.40	**********
								Q8(37)＝被信友	M＝4.37	**********
								Q8(44)＝感共友	M＝4.36	**********
				0				Q8(62)＝明性格	M＝4.35	**********
								Q8(36)＝有望職	M＝4.28	**********
								Q8(52)＝熱心保	M＝4.25	**********
							0	Q8(7)＝資技有	M＝4.24	**********
								Q8(50)＝職気合	M＝4.23	**********
								Q8(9)＝職親切	M＝4.23	**********
			0					Q8(12)＝施師助	M＝4.20	**********
		0						Q8(21)＝教家族	M＝4.17	**********
			0					Q8(61)＝施昔絶	M＝4.17	**********
								Q8(26)＝職訓練	M＝4.13	**********
			0					Q8(33)＝施内省	M＝4.08	**********
			0					Q8(40)＝施職教	M＝4.06	**********
								Q8(29)＝職無差	M＝4.05	**********
								Q8(43)＝楽職就	M＝3.98	**********
		0						Q8(28)＝優し親	M＝3.95	**********
								Q8(56)＝両親有	M＝3.92	**********
					0			Q8(17)＝隣指導	M＝3.91	**********
								Q8(54)＝施健復	M＝3.85	**********
0								Q8(53)＝師悩解	M＝3.84	**********
					0			Q8(45)＝談隣有	M＝3.81	**********
			0					Q8(35)＝親厳格	M＝3.79	**********
0								Q8(18)＝師信頼	M＝3.78	**********
0								Q8(46)＝学友受	M＝3.73	**********
						0		Q8(4)＝隣人受	M＝3.71	**********
0								Q8(5)＝師無差	M＝3.65	**********
			0					Q8(6)＝施師厳	M＝3.62	**********
								Q8(57)＝何就職	M＝3.60	**********
								Q8(58)＝虐助友	M＝3.56	**********
								Q8(47)＝施補習	M＝3.53	**********
							0	Q8(41)＝優秀知	M＝3.51	**********
	0							Q8(2)＝高額職	M＝3.50	**********
					0			Q8(31)＝隣職紹	M＝3.50	**********
								Q8(19)＝施外師	M＝3.48	**********
0								Q8(60)＝師評価	M＝3.48	**********
0								Q8(11)＝師易教	M＝3.41	**********
								Q8(20)＝体力有	M＝3.39	**********
0								Q8(32)＝師優し	M＝3.39	**********
0								Q8(39)＝師補習	M＝3.36	**********
								Q8(59)＝隣娯楽	M＝3.21	**********
								Q8(25)＝師厳格	M＝3.16	**********
								Q8(16)＝友職紹	M＝3.14	**********
							0	Q8(13)＝高卒歴	M＝3.09	**********
	0							Q8(23)＝金助友	M＝3.06	**********
	0							Q8(24)＝隣黙認	M＝3.06	**********
	0							Q8(1)＝家金持	M＝2.96	**********
	0							Q8(51)＝出泊友	M＝2.96	**********
	0							Q8(38)＝金助隣	M＝2.95	**********
	0							Q8(22)＝休短職	M＝2.69	*

4－5　分析手続6　更生促進主成分の重回帰分析

各主成分得点及び年齢，入所回数，累進級（少年鑑別所は入所日数）を説明変数として，重回帰分析により，各更生意識への影響を見た。

表4　更生促進要因に関する重回帰分析結果

重回帰分析結果 ＋－→1％水準有意 ＋－→5％水準有意	更生への気持ち		更生への自信		周囲の更生率		施設の必要性		施設体験の効果	
	院	鑑	院	鑑	院	鑑	院	鑑	院	鑑
更生促進要因に関する重回帰分析結果の概要										
年齢が上がるほど			＋	＋		＋				－
入所回数が増えるほど		－	－	－			－	－		
1級上(多い在所日数)ほど				＋	－					
主成分①を重視するほど										
主成分②を重視するほど	－	－	－	－			－		－	
主成分③を重視するほど			＋	＋	＋				＋	
主成分④を重視するほど	＋	＋	＋	＋	＋		＋	＋	＋	＋
主成分⑤を重視するほど	＋		＋							
主成分⑥を重視するほど							＋			
主成分⑦を重視するほど			＋							
主成分⑧を重視するほど				＋						

少年院，少年鑑別所に共通した結果は，

・入所回数が増えるほど，更生への自信を失い，施設は更生にとってマイナスという認知が増えること

・周囲からの便宜供与的な支援を重視する者ほど，更生する意思も自信も乏しいこと

・施設や親の厳しい指導を更生促進要因として重視する者ほど，更生する意思・自信を持ち，施設の存在や中での生活にも積極的な評価をしていること

・年齢が増すほど，更生への自信が出ること

・家族関係を重視する者ほど更生に自信を持っていること

である。

また少年院固有に見られたものとしては，

・自己の意思や心がけを重視するものほど，更生する意思と自信が出ること

・友人や隣人の受容を重視する者ほど，更生への自信が出ること

・施設や親の厳しい指導を更生促進要因として重視する者ほど，仲間が多く更生すると考えること

・1級上になるほど，仲間があまり更生できないと考えること

・周囲からの便宜供与的な支援を重視する者ほど，施設の必要性も有効性にも疑問を持っていること

・近隣の親切を更生促進要因として重視する者ほど，施設の必要性を高く評価していること

・家族関係を重視する者ほど，仲間も多く更生し，施設生活も役立つと考えるといったことがあげられる。

なお，少年鑑別所固有のものは，

・年齢が増すほど，仲間が多く更生すると考え，しかし同時に施設生活の有効性に疑問を持ちやすいこと

・入所回数が増えるほど，更生する意思を失うこと

・入所期間が長くなるほど，所有している恵まれた条件を重視する者ほど，更生への自信を持つことといったことがあげられる。

図６　更生阻害要因の重視度グラフ

注．「更生阻害主成分」＝後述する主成分分析の結果からその項目が属している主成分
「項目名」　＝問９の質問番号
「略号」　＝項目内容を略したもの
「平均」　＝『とてもじゃま』を５、『まったくじゃまでない』を１とし，N.A.を除いた平均
「グラフ」　＝平均に基づいたグラフ（目安として作成）

更生阻害主成分 1	2	3	4	5	6	7	項目名	略号	平均	グラフ
							Q9(28)	意志弱	M=4.54	**********
0							Q9(31)	暴団誘	M=4.35	**********
							Q9(2)	職冷淡	M=4.31	**********
	0						Q9(24)	金喝友	M=4.30	**********
							Q9(39)	隣易疑	M=4.29	**********
							Q9(35)	易激高	M=4.29	**********
							Q9(8)	家仲悪	M=4.27	**********
0							Q9(17)	悪誘友	M=4.23	**********
0							Q9(40)	不良誘	M=4.22	**********
				0			Q9(50)	家信無	M=4.18	**********
						0	Q9(53)	警易疑	M=4.17	**********
							Q9(41)	施友邪	M=4.16	**********
0							Q9(30)	職悪誘	M=4.15	**********
	0						Q9(18)	隣冷目	M=4.12	**********
	0						Q9(25)	隣疎外	M=4.10	**********
							Q9(38)	離脱不	M=4.08	**********
	0						Q9(23)	職疎外	M=4.06	**********
0							Q9(27)	施悪染	M=4.01	**********
							Q9(5)	師差別	M=4.00	**********
				0			Q9(57)	待家無	M=3.96	**********
							Q9(36)	酒乱家	M=3.95	**********
				0			Q9(58)	職場無	M=3.92	**********
	0						Q9(12)	学疎外	M=3.91	**********
							Q9(22)	家話無	M=3.90	**********
	0						Q9(10)	虐人有	M=3.89	**********
							Q9(49)	対人不	M=3.89	**********
	0						Q9(26)	学無視	M=3.89	**********
							Q9(13)	施師傷	M=3.89	**********
				0			Q9(59)	談友無	M=3.87	**********
	0						Q9(45)	友疎外	M=3.85	**********
0							Q9(32)	隣悪多	M=3.85	**********
				0			Q9(60)	談保無	M=3.82	**********
						0	Q9(54)	学施歴	M=3.81	**********
							Q9(48)	施信無	M=3.79	**********
							Q9(51)	適職無	M=3.78	**********
0							Q9(52)	施仲誘	M=3.77	**********
							Q9(63)	身障害	M=3.71	**********
							Q9(6)	施評不	M=3.70	**********
							Q9(56)	文身有	M=3.69	**********
							Q9(20)	社会絶	M=3.68	**********
							Q9(33)	師体罰	M=3.66	**********
							Q9(16)	職気不	M=3.59	*********
							Q9(44)	職注意	M=3.58	*********
					0		Q9(11)	隣溜場	M=3.52	********
							Q9(43)	親浮気	M=3.47	********
0							Q9(46)	隣浮浪	M=3.47	********
0							Q9(47)	後輩誘	M=3.41	*******
					0		Q9(3)	遊誘友	M=3.38	*******
							Q9(21)	体力無	M=3.38	*******
			0				Q9(1)	執注家	M=3.37	*******
							Q9(37)	辛仕事	M=3.29	******
							Q9(34)	施不訓	M=3.26	******
		0					Q9(19)	学業不	M=3.25	****
			0				Q9(29)	親厳格	M=3.21	****
		0					Q9(42)	低知能	M=3.19	****
							Q9(9)	収入差	M=3.18	****
			0				Q9(61)	師厳格	M=3.17	****
							Q9(62)	施感染	M=3.15	***
			0				Q9(55)	施厳格	M=3.13	***
					0		Q9(4)	隣盛場	M=3.09	***
		0					Q9(14)	学歴無	M=2.99	**
		0					Q9(7)	資技無	M=2.92	*
		0					Q9(15)	家貧困	M=2.91	*

4－6　分析手続7　更生阻害要因について

問8と同様にして，更生を阻害する要因を見た問9(注2)について分析を行うと次のようになる。（図6）

ここでも紙数の関係から少年鑑別所と少年院を一緒に処理した結果を提示した。2つを比較すると，少年鑑別所の少年が少年院の少年より有意に重視している更生を阻害する項目は，63項目の内，「家族のしつこい注意」，「遊びに誘う友人」，「同僚と気が合わない」，「体が弱い」，「怒りっぽい」，「頭が悪い」，「人付き合いが下手」，「施設仲間の誘い」，「警察からの呼出」，「身体障害」といった項目となり，少年院の少年が少年鑑別所の少年より重視している項目はなかった。また，ここでの順位相関は，0.922であり，更生阻害項目についても重視度に大きな相違はないものと考えられた。

阻害要因として少年が重視しているものを見ると，「意志の弱さ」，「暴力団からの勧誘」，「職場で冷淡にされること」，「金品を喝取するような友人がいること」など，更生促進の要因に比べ，阻害要因として挙げられたものが，多岐に渡っているのが特徴である。ただ，反対に更生をあまり阻害しないであろうという要因を見ると，「学歴がないこと」，「資格・技能がないこと」，「家庭が貧困であること」など，社会的な負因が主になっている。実際には学歴も資格・技能も持っていない少年達であるが，この結果からは，それらを阻害要因としては考えていない姿が浮かび上がる。

4－7　分析手続8　更生阻害要因の主成分分析

次にこれらの項目に主成分分析を行い，固有値の低い成分，因子負荷量の低い項目を落とすなどして，項目を36に整理した。

その結果，以下のように仮に命名できる7つの主成分が得られた（グラフ参照）。

①不良者誘惑因　第一因子－不良者からの誘いを阻害要因と考える因子
　不良誘Q9(40)　暴団誘Q9(31)　職悪誘Q9(30)　隣悪多Q9(32)　施悪染Q9(27)
　悪誘友Q9(17)　後輩誘Q9(47)　隣浮浪Q9(46)　施仲誘Q9(52)

②疎外虐待因　第二因子－人間関係での疎外・虐待を阻害要因と考える因子
　職疎外Q9(23)　学疎外Q9(12)　隣疎外Q9(25)　虐人有Q9(10)　友疎外Q9(45)　金喝友Q9(24)
　学無視Q9(26)　隣冷目Q9(18)

③劣等条件因　第三因子－生得的な負因・環境的な悪さを阻害要因と考える因子
　学歴無Q9(14)　低知能Q9(42)　家貧困Q9(15)　学業不Q9(19)　資技無Q9(7)

④過干渉厳格指導因　第四因子－過干渉・厳格な指導を阻害要因と考える因子
　親厳格Q9(29)　執注家Q9(1)　施厳格Q9(55)　師厳格Q9(61)

⑤孤立無支援因　第五因子－孤立を阻害要因と考える因子
　待家無Q9(57)　談友無Q9(59)　家信無Q9(50)　職場無Q9(58)　談保無Q9(60)

⑥遊興刺激因　第六因子－身近な遊興刺激を阻害因子と考える因子
　隣盛場Q9(4)　遊誘友Q9(3)　隣溜場Q9(11)

⑦ラベリング因　第七因子－ラベリングを阻害要因と考える因子
　警易疑Q9(53)　学施歴Q9(54)

4－8　分析手続9　更生阻害主成分の重回帰分析

各主成分得点及び年齢，入所回数，累進級（少年鑑別所は入所日数）を説明変数として，重回帰分析により，各更生意識への影響を見た。

表5　更生阻害要因に関する重回帰分析結果

重回帰分析結果 ＋－－→1％水準有意 ＋－→5％水準有意	更生への気持ち		更生への自信		周囲の更生率		施設の必要性		施設体験の効果	
	院	鑑	院	鑑	院	鑑	院	鑑	院	鑑
更生阻害要因に関する重回帰分析結果の概要										
年齢が上がるほど			＋			＋				－
入所回数が増えるほど		－	－	－			－	－		－
1級上(多い在所日数)ほど				－	－	＋				
主成分①を重視するほど	＋	＋	＋	＋	＋		＋	＋	＋	
主成分②を重視するほど	＋		＋		＋					
主成分③を重視するほど		－	－							
主成分④を重視するほど	－	－	－	－	－		－		－	
主成分⑤を重視するほど			＋		＋	＋				
主成分⑥を重視するほど	＋						＋		＋	
主成分⑦を重視するほど			＋							

少年院，少年鑑別所に共通しているのは，

- 入所回数が増えるほど，更生への自信を失うし，施設がマイナスという認知がされること
- 不良者からの誘いを阻害要因と考える者ほど，更生する意思と自信があり，施設の必要性を積極的に評価していること
- 厳格な指導が更生を阻害すると考える者ほど，更生する意思も自信も乏しくなること
- 孤立や周囲から支援がないことを阻害要因と考える者ほど，仲間が多く更生できると考える傾向があること

などが示された。

少年院に限定した場合はさらに

- 周囲からの疎外や虐待を危惧する者ほど，更生への意欲と自信を見せ，周囲も更生すると考えていること
- 身近な遊興刺激を疎外要因と考える者ほど，更生する意思を持ち，施設の存在や生活体験を更生に有効と考えること
- 反対に厳格な指導が更生を阻害すると考える者ほど，施設の存在や生活体験を否定的に捉えていること
- 孤立や周囲から支援がないことを阻害要因と考える者ほど，ラベリングを不安に感じている者ほど，年齢が上がるほど，生得的な負因や社会環境の悪さを軽視するほど，更生への自信が出ること
- 1級上になるほど，仲間があまり更生できないと考えること
- 不良者からの誘いを阻害要因と考える者ほど，仲間が多く更生すると考え，施設体験の有効性を認知していること

が分かった。

少年鑑別所の場合は，

・年齢が増えるほど，仲間が多く更生すると考えると同時に，施設の生活体験を否定的に捉えること
・入所回数が増えるほど，更生する意思を失い，施設の生活体験を否定的に捉えること
・入所回数が増えるほど，更生への自信を失うが，しかし，同時に仲間が多く更生すると考えること
・生得的な負因や社会環境の悪さを重視するほど，更生する意思を失うこと

などが見られた。

4－9　研究2の考察とまとめ

全般的に，促進要因としても阻害要因としても，心がけや対人関係がかなり重視され，更生への意識に与える影響も大きいことが分かった。良くも悪くも対人関係を重視し，自己の心がけを大切に思い，ワル仲間から誘われることを真剣に危惧する者ほど，更生意欲・自信は高い。反対に厳格な指導について否定的な見解を示す者ほど，施設での体験や指導に懐疑的になり，また周囲からの安直な便宜供与を更生に重要な事項であると考える者ほど，更生の意思も自信も乏しいと言える。具体的には以下のようになる。

(1)　少年院に収容された少年と少年鑑別所に収容された少年を比較した場合，更生を促進する項目と更生を阻害する項目には，その重視度において基本的には大きな違いはない。強いて言えば，少年鑑別所の少年の方が，持って生まれた要因や置かれている生活環境要因を重視する傾向が見られた。少年院の少年が，社会から切り離され，同じような能力と境遇にいる仲間に囲まれて長期間生活した結果，こうした要因をあまり意識しなくなったか，あるいは，矯正教育を受けた結果，少年院の少年が，自分の努力の及ぶ範囲のことをより重視するようになったと考えられる。ただ，先に述べたように2群に基本的な差はなく，促進要因の場合は，自分の意思や心構えを第一に，次に家族関係を重視し，阻害要因についても，意志の弱さを第一にあげ，続いて周りからの悪い誘いや迫害を重視していることが分かった。

(2)　更生意思に影響する要因を見ると，まず，「家出時の宿泊先の提供や容易な金銭の無心などが更生に役立つ」と回答する者ほど，そして「不良者からの誘い」を更生阻害要因として軽視する者ほど，更生の気持ちをなくしている。ただ，そもそも更生を真剣に考える者が，「家出時の宿泊先」などを心配するとも思われないし，身近にいる不良者の存在を無視するとも思われない。この結果は，むしろ，更生する気のない者が，施設退所後も安楽な生活や安直な支援を期待し，不良交遊に対しても安直に考えやすいことを示したと捉えた方が良い。

また，促進要因として「親・施設などの厳しい指導は更生を促進する」と認知する者ほど更生の意思を持ち，反対にそれを阻害要因として認知する者ほど意思を失うという点については，親や施設などからの指導への態度は，単に従順さや干渉を嫌う傾向を示すというよりも，社会規範に則った生活をする気持ちがあるかどうかに関係していると考えられる。理屈の上では，「更生は自分なりのやり方でするから，周囲の指導は要らない」とする考え方もできるが，実際には，そうした事例はかなり少なく，「周囲の指導は要らない」とする者の多くは，「更生する気がない」者と考えて良いようだ。

なお，少年院の少年に特徴的に見られた傾向としては，更生を促進する要因として自己の意思を重視し，周囲から疎外・虐待されることや遊興刺激に曝されることを阻害要因として重視する

者ほど，更生の意思を持つという結果が得られている。ここでは更生しようとすれば，誘惑や疎外に負けない意志が大切としている少年の姿勢がよく現れている。更に少年鑑別所の少年に特徴的に見られた傾向としては，「学歴・技能がない，頭が悪い，貧しい」といった阻害要因を重視する者ほど，更生の意思を失う傾向がある。劣等感を持った少年の更生の難しさを暗示している結果と言えよう。これが特に少年鑑別所の少年にはっきり現れたことについては，逆に，社会から切り離されて，似たような仲間と長く暮らしている少年院の少年が，こうした劣等感をあまり意識しなくなっているのではないかと考えられる。

(3) 次に，更生への自信に影響を与える要因については，「安直な便宜供与が更生を促進する」と考えるほど自信をなくし，「不良者からの誘惑を阻害要因として重視する」ほど自信を持つこと，「親・施設などの指導」を促進要因と考えるほど自信が増し，阻害要因と考えるほど自信をなくすという結果などは，上で述べた意思の結果と同じである。他に自信に関するものとして，入所回数がある。入所回数が増え，過去に更生に失敗した体験が重なれば，更生への自信に変化が生じてくるのは，当然であろう。ただ，少年鑑別所の少年の場合には，入所回数の増加は，更生の意思そのものを失っていることにもつながる点が特徴的である。また，単純に考えれば，入所回数が多いということは，年齢的にも成人に近づくということになるが，年齢に関しては反対に成人に近づくほど，更生への自信が深まるという傾向が見られた。すなわち，年齢的に高くなると，更生への自信が増す。しかし，入所回数が多くなると，それを上回るマイナスの影響を更生への自信に与えていることになる。

また，「家族関係を促進要因として重視する」ほど更生に自信を持つという結果は，円満な家族関係が，更生できるという自信を少年に与える上で大切な条件となっていることを示している。家族が崩壊しているとか，家族仲がひどく悪いといった状況があって，家族の受容が期待できない場合には，更生に自信をなくすことは当然予想される。

少年院の少年に限定した場合は，自分の意志と隣人関係を促進要因として重視し，疎外・虐待や孤立，ラベリングを阻害要因として重視している者ほど，そして，自己の負因を阻害要因として軽視できる者ほど更生への自信を見せる傾向があった。ここから少年院の少年が更生への自信を持つためには，自己の意志への信頼と劣等感の払拭が，そして対人関係の大切さを認識することが必要であると言える。更に少年鑑別所の少年に関しては，自分の持つ学歴・技能・知能などの好条件を促進要因として重視する者が，更生への自信を持つという結果が出ている。一見うなずける結果であるが，最初に述べたように学歴や技能，資格もない者が多い今回の少年達の実態から見れば，ましてや短期間の収容期間しかない少年鑑別所で，この結果を処遇に結び付けることは困難と言わざるを得ない。

(4) その他，施設仲間の更生をどう見るか，施設の必要性，施設体験の有効性などに対しては，「親・施設からの厳格な指導」をどう捉えるかに係っている。これを促進要因として重要と考える，つまり厳格な指導を自分に必要なものとして受け入れる気持ちのある者は，施設に対しても肯定的な評価をするが，特に少年院では指導を阻害要因として大きく考える者ほど，施設に対しても否定的になる様子が見られた。

(5) 全般的に，促進要因としても阻害要因としても，心がけや対人関係がかなり重視され，更生への意識に与える影響も大きいことが分かった。良くも悪くも対人関係を重視し，自己の心がけを大切に思い，ワル仲間から誘われることを真剣に危惧する者ほど，更生意欲・自信は高い。反対に厳格な指導について否定的な見解を示す者ほど，施設での体験や指導に懐疑的になり，ま

た周囲からの安直な便宜供与を更生に重要な事項であると考える者ほど，更生の意思も自信も乏しいと言える。

(6) これらの点を踏まえて処遇に関して言えば，更生する意思が乏しい者は，社会復帰後の交遊や遊びに関して，安直に考える傾向があるので，話し合いや面接などの機会に，こうした傾向がないか十分に関心を払う必要がある。時には「なぜ，自分にとって施設生活が必要であり，役立つか」を少年に話し合わせることも必要になる。また，少年鑑別所であれ，少年院であれ，入所回数が増加すると更生への自信を失うことが多いが，そうした少年には，年齢的な成長や成人後の生活などを具体的に考えさせる，つまり年齢的な要因を意識させるのも有効と思われる。更に，家族関係の円滑さは，更生への自信に大きく影響するので，引受に関する環境調整だけでなく，面会や保護者会といった機会を捉えて，双方に働きかけていく作業も欠かせない。

また，少年院に限定すると，比較的自分の心がけや対人関係を促進要因として重視している者が多いが，反面，人付き合いに対する不安，ラベリングへの不安なども強い。これに対処する方法としては，日課活動などを通して挨拶などの日常生活習慣を身に付けさせ，人との協力体験を積み，感情抑制力を養う一方で，社会で通用するような資格や技能の育成などが重要となろう。

少年鑑別所の場合は，少年が資質や社会的負因を重視しているものの，実際には能力的にも，学歴や資格などの面でも恵まれていないことが多い。それらが，ひけ目となって更生の意欲を殺いでいる可能性も高いと思われる。しかし，少年鑑別所では，その施設の性格上，いわゆる技能的な訓練も，長期的な生活訓練も行えない。従って，自分の長所に目を向けたり，自助努力の大切さを考えたり，単に審判結果のみに関心を奪われるのではなく，ここでの収容体験がどう自分に役立つかを考えたりする機会を持てるように配慮してやることが必要である。

5 今後の問題

最後に調査対象について付記したい。更生意識に関する調査・検討を行うことに主眼を置いたために，サンプリングに関しては，現在，施設に収容されている母集団の代表的な標本抽出を行うと言うよりは，年齢，級別などが，なるべく均等になるように標本抽出を行っている。そのために必ずしも母集団全体の持つ特徴が，反映されていない可能性がある。また，偏りの少ないサンプリングと言った点でも，女子に関しては十分にその目的を達成するほどの数が得られていないこと，成人で言えば，全体として長期刑を言い渡されるような罪名，具体的には「殺人」などが多くなってしまったことが，サンプリング上の問題としてあげられる。つまり，数の関係で有意差が出なかった要因が他にもある可能性があるし，例えば特徴の現れたＬ群に関しても，Ｌ群の特性というよりも，「殺人犯」の更生意識の特徴が現れてしまっている危険性がある。

このサンプリングの問題については，全調査が終了した時点で，更に検討を重ねたい。

（注1）

問8

つぎに「立ちなおり」に役立ちそうなことがかかれています。それぞれについて，あなたが立ちなおるときにとても役立つと思えば「とても役立つ」に，やや役立つと思えば「やや役立つ」に，あまり役立たないと思えば「あまり役立たない」に，まったく役立たないと思えば「まったく役立たない」に，どちらともいえない，わからないというときは「どちらでもない」に，せんをひいてください。

1．家族が金持ちであること
2．たくさんの給料をくれる仕事につくこと
3．差別したりせず，あたたかく受け入れてくれる友人がいること
4．近所の人々が自分をあたたかく受け入れてくれること
5．学校の先生がさべつしないこと
6．しせつの先生がきびしく指導してくれること
7．仕事に役立つしかくやぎのうがあること
8．何でも話し合える家族がいること
9．職場にやさしく親切な人がいること
10. 何でも相談にのってくれる友人がいること
11. 勉強をわかりやすく教えてくれる先生が学校にいること
12. しせつの先生が話をきいてくれたり，じょげんをしてくれること
13. 高校卒業のがくれきがあること
14. 自分のことを信じてくれる家族がいること
15. 自分にあった仕事につくこと
16. 仕事を紹介してくれる友人がいること
17. 悪いことをしようとしたとき，注意してくれる人が近所にいること
18. 生徒をしんらいし，生徒の言うことをちゃんときいてくれる先生が学校にいること
19. とくし面接いいん，教かいしなどぶがいの先生が話をきいてくれたり，つながりをもってくれること
20. 人一ばいの体力があること
21. いろいろなことを教えてくれる家族がいること
22. はたらく時間が短いことや休日が多いこと
23. 金に困ったときに，助けてくれる友人がいること
24. 近所の人が自分たちのことをそっとしておいてくれること
25. きびしくしどうしてくれる先生が学校にいること
26. しせつで職業くんれんやしかくがとれるしどうをしてくれること
27. がまん強さがあること
28. やさしい親がいること
29. 職場の人がさべつしないこと
30. 悪いことをしそうになったときに，注意してくれる友人がいること
31. 仕事のせわなどをしてくれる人が近所にいること
32. やさしい先生が学校にいること
33. しせつでじっくり反省ができること
34. れいせいにものごとを考える力があること
35. きびしく指導してくれる親がいること
36. 将来のびる仕事につけること
37. 自分を信用してくれる友人がいること
38. 金に困っているときは助けてくれる人が近所にいること
39. 勉強のおくれをとりもどすために，学校の先生がとくべつにしどうしてくれること
40. 働くことのたいせつさやたのしさをしせつの先生が教えてくれること
41. わりとあたまがいいこと

42. 自分がかえるのを待っている家族がいること
43. すぐにつぶれたりしない仕事につくこと
44. いっしょになって喜んだり悲しんだりしてくれる友人がいること
45. いろいろ相談にのってくれる人が近所にいること
46. 学校でクラスの人があたたかく受け入れてくれること
47. しせつの先生が読みかきや計算の勉強を教えてくれること
48. 人づきあいをうまくできる力があること
49. 家族が仲よく，まとまりがよいこと
50. 気のあう仲間がいる職場であること
51. 家出したときに，とめてくれる友人がいること
52. 話のわかるねっしんな保護司がいること
53. 生徒のなやみをかいけつしてくれる先生が学校にいること
54. しせつでけんこうをかいふくさせたり，体力のこうじょうをさせてくれること
55. 強いいしをもっていること
56. 両親がそろっている家庭であること
57. とにかくどんな仕事でもよいから仕事につくこと
58. いじめられそうなときに，助けてくれる友人がいること
59. けんぜんなごらくしせつやスポーツしせつが近所にあること
60. 勉強いがいの面でも学校の先生にひょうかしてもらえること
61. いったんしせつに入り，かこのでたらめな生活とえんがきれること
62. 明るいせいかくをもっていること

（注２）

問９

つぎに「立ちなおり」にじゃまになりそうなこと，立ちなおるいよくをなくさせるようなことがかかれています。それぞれについて，あなたが立ちなおるときにとてもじゃまになると思えば「とてもじゃま」に，ややじゃまになると思えば「ややじゃま」に，あまりじゃまにならないと思えば「あまりじゃまでない」に，まったくじゃまにならないと思えば「まったくじゃまでない」に，どちらともいえない，わからないというときは「どちらでもない」に，せんをひいてください。

1．くどくど注意する家族がいること
2．職場の人につめたい目でみられたり，しせつに入ったことをとやかく言われること
3．遊びにさそう友人が多いこと
4．近所にさかり場や遊び場があること
5．学校の先生にさべつされること
6．しせつの先生が自分を正しくひょうかしてくれないこと
7．仕事に役立つしかくやぎのうがないこと
8．家族どうしがけんかをしたり，まとまりが悪いこと
9．職場のなかまより給料（きゅうりょう）がやすいこと
10. いじめる人がいること
11. 近所に遊びなかまのたまり場があること
12. 学校でクラスの人からじゃまものにされること
13. しせつの先生がきずつけるようなことを言うこと
14. がくれきがないこと
15. 家庭がまずしいこと
16. 職場に気のあわない人がいること
17. 非行にさそう友人がいること
18. 近所の人々がつめたい目で見たり，自分たちのことをかげでこそこそ言うこと

19. 勉強についていけないこと
20. しせつ生活が長くなって，社会生活から遠ざかること
21. 体が弱いこと（病弱であること）
22. 家族間で会話（かいわ）がないこと
23. 職場の人からなかまはずれにされること
24. むりにお金をまきあげる友人がいること
25. 近所の人々が自分たちをじゃまものにすること
26. 学校で先生からむしされること
27. しせつの中で他のなかまから悪いことを教えられること
28. いしが弱いこと
29. 親がきびしすぎること
30. 職場の人から悪いことにさそわれること
31. ヤクザや暴走族からのさそいがあること
32. 近所に非行少年がたくさんいること
33. 学校で先生からたいばつをくわえらえること
34. しせつで自分のきぼうする作業やくんれんが受けられないこと
35. すぐあたまにきやすいこと
36. 酒ぐせの悪い家族がいること
37. つらい仕事ばかりさせられること
38. ヤクザや暴走族からのりだつをみとめてくれないこと
39. 近所で非行があると，すぐにうたがう人がいること
40. ツッパリや不良のなかま，せんぱいがさそいにくること
41. しせつでまじめにやろうとすると他のなかまがじゃますること
42. あたまが悪いこと
43. 親がうわきをしていること
44. 職場で自分ばかりがきびしく注意されたりすること
45. 友人からなかまはずれにされること
46. 近所に働かず遊んでいる人がたくさんいること
47. ツッパリのこうはいが自分をたよってくること
48. しせつの先生がしんらいしてくれないこと
49. 人づきあいがへたなこと
50. 家族が自分を信用（しんよう）してくれないこと
51. 自分にあった仕事がみつからないこと
52. しせつなかまがたずねてくること
53. ちょっとしたことでけいさつによび出されること
54. 学校でかこの非行やしせつにいたことにふれられること
55. しせつにきびしすぎる先生がいること
56. いれずみがあること
57. 自分をまっている家族がいないこと
58. がくれきやしかくがないため，自分をやとってくれる職場がないこと
59. そうだんし，たよれるよい友人がいないこと
60. 保護司がそうだんにのってくれないこと
61. 学校にきびしすぎる先生がいること
62. しせつでしかつうようしないことばやこうどうをおぼえてしまうこと
63. からだにしょうがいがあること